

小泉雄紀氏の発表についての

質疑応答

(質問者 2 名)

【質問】 上枝美典（慶應義塾大学）

ヒュームが全面的懐疑による哲学的憂鬱からどのように脱却して、後の探求を遂行することができたかという問題について、いくつかの先行研究による解釈を批判的に参照しつつ自説を展開させる意欲的な内容である。ここでは紙幅の都合上数々の美点には触れず、司会者にとって難しく感じた二つの点に絞ってコメントする。

1. まず、副題に「徳認識論的解釈」とあるが、この「徳」をどのように理解しているのかを読み取るのが難しい。

全面的懐疑による哲学的憂鬱から脱却する際に、「誇り」と「卑下」という二つの情念から「謙虚さ」という徳が獲得されると論じられているが、この獲得の過程についての説明が見当たらない。これら二つの情念が存在すれば自動的に謙虚さが発生するわけではないであろう。そうすると、第5節の「こうして誇りと卑下という二つの情念が出揃ったことになる。この二つの情念はこうして釣り合い、探究者は謙虚さの徳を獲得する」という論述には、重要な何かが省略されているように思われる。その点をもう少し詳しく説明していただきたい。

この疑問の内容を補足すると、上記の記述は、ある情念がそろそろ自動的にある徳が発生するというかたちで、徳が情念に随伴する、あるいは徳が情念に還元されるという印象を与えるが、徳というアイデアそれ自体が、そのような還元主義的な理解を拒むと思われる。この点が明らかにならない限り、偽なる哲学から真なる哲学へのヒュームの移行の内実が解明されないように司会者には思われるがいかがだろうか。

2. 論文全体の主張の趣旨について、更に説明を加えていただきたい。

かりに、ヒュームは「謙虚さ」の徳を獲得したので、哲学的憂鬱を通過して、真の哲学へと向かうことができたのだとする。しかしこれは、ヒューム個人の精神史としての事実がそう説明されうるということなのか、それとも、そこに何らかの哲学的な重要性、とくに徳認識論が関係する領域での重要性があるということなのか。副題を見るかぎり、発表者の意図

は後者のはずだと思われるが、その内実は結論部で軽くほのめかされているだけであり、実質的な議論は展開されていない。

特に、参照されているタイプの徳認識論が念頭に置くのは、常識的で健全な知識主体あるいは知識共同体だと思われるが、全面的懷疑に陥るほどのヒュームの厳しい思考は、そのような一般的な知識の枠組みでは捉えられない極めて特殊なものではなかったのか、という疑問に対して、発表者はどのように応答するだろうか。ヒュームの懷疑論は不徳の致すところであり、その後謙虚さの徳を獲得してまっとうな哲学者になった、というヒューム像を発表者は主張されるのだろうか。

以上です。

【回答】 小泉雄紀（京都大学）

以下に、二点に分けて回答いたします。

第一に、誇りと卑下という二つの情念と謙虚さの徳の関係についてですが、ヒュームがこの点に言及するのは徳と悪徳の価値の源泉について説明する箇所においてです。ヒュームによれば、謙虚さはやはり誇りと卑下にある種還元されて説明されるものであり、謙虚さの価値は誇りの持つ有用性と快さによって最終的に説明されます(T 3.3.2.14)。

一方で、ヒュームは徳（と悪徳）が持続的で、すぐに変化するものでないことを認めています。例えばヒュームが「何らかの行為に徳や悪徳がある場合でも、それは単に性質ないし性格の標としてである」(T 3.3.1.4)と述べる時には、性質や性格が十分に持続的であり、諸々の行為を生み出すものであることが念頭に置かれており、その比較的变化しづらいものを考察することから徳が感じ取られる(T 3.1.2.1)と言われます。

つまり、謙虚さの徳（より正確には、それを見たり考察したりする者に徳を感じさせる性質・性格）は、誇りと卑下に還元されるが、十分に持続するものであると考えられているということになります。ここで生じる問題は、その誇りと卑下が簡単に増減してしまうのではないか、従って謙虚さの徳も成立したり消滅したりしてしまうのではないか、ということですが、この点については、ヒュームが他の徳と誇りとの関係を述べている箇所から応答することができるように思われます。ヒュームによれば、「一般に、我々が「英雄的な徳」と呼び、大いなる高揚した性格に属するとして賛美するものは全て、安定しよく確立された誇りないし自己尊重に他ならないか、その情念を多分に含んでいると、我々は述べてよい」(T 3.3.2.13、強調は発表者)のであり、このように誇りが「安定しよく確立され」ることがあるのであれば、それを基盤とする謙虚さも持続性を保つことができるのではないのでしょうか。

いずれにせよ、ヒュームの徳概念が現代の徳認識論の文脈で共有されている徳概念との間に持つズレについては、明確化して説明することが今後の課題となってくるように思われます。

第二に、論文全体の趣旨についてですが、本発表はあくまでヒューム解釈の枠組みの中で、ヒューム研究のトピックである哲学への復帰を徳の観点から解釈するということを意図して為されたものです。しかし、これは単にヒュームという一個人の特殊な精神史を解説したということではなく、ヒュームが他の人々に向けて提示する探究の方法論がいかにして導かれるのかを解釈したものでもあります。私見では、発表内でも言及した制御的認識論の一形態として、ヒュームの主張する緩和された懐疑と謙虚さに基づく探究というものの自体を、ヒューム解釈から切り離して考察することにも意義があると考えていますが、この点に関してはまだ十分に研究を進められていないというのが正直なところであります。

ヒュームが独白のような形で『人間本性論』一卷の結論部を書いていることによって、この哲学者としての「発展」は極めて特殊な事例のようにも読むことができますが、ヒュームがこの箇所ですべて「偽なる哲学者」たちの誤りを訂正することを望んでいると明言していることや、全面的懐疑が（ヒュームの想定の上では）哲学的探究をする上で避けられないものと考えられていることから、これは、少なくともヒュームの意図としては、ヒュームだけに当てはまる話ではないと考えます。おそらく個人差があるとすれば、全面的懐疑をどこまで深刻に受け取るのか、またはどれだけ時間をかけて「哲学的憂鬱」から立ち直るのかという点についてであり、ヒュームが一人称的にこの経過を書いているために、このような激しい揺れ動きがとても一般的なものには思えないという反応がなされるのではないのでしょうか。

実際にヒュームが長い間「偽なる哲学者」であったのか、それとも一過性の過ちのようなものであったのかについて正確なことはわかりませんが、最終的な立場に到達したヒュームがこうしたある種の発展史的な見方で自身の思想的歩みとあるべき探究の仕方について語っているというのは確かなように思われます。

以上

【質問】 澤田和範（関西学院大学）

小泉さんの議論のなかで、私が哲学的な論点として興味深いと思うのは、謙虚な「真の哲学者」という立場が、理性的議論ではなく、誇りと卑下が釣り合った「結果」として生じると主張されている点です(p. 10)。もしそうだとすれば、この論点はかつてのフォグリンの主張したような論点——「我々が認識しなければならないヒュームの考えのきわめて重要な点とは、哲学的な立場というものが、彼自身の立場も含めて、因果的要因の産物であると

いうことだ」(R. Foglin [1985], *Hume's Skepticism in the Treatise of Human Nature*, p. 148) ——と重なっていると思います。つまり、謙虚な「真の哲学者」という彼自身の最終的な立場に至るまえに、ヒューム自身が一度は傲慢な「偽なる哲学者」である必要があったのであり、そのうえで、「全面的懐疑」という自己反省を経て、卑下を実際に感じる必要があった。さて、このような理解でよいのだとすると、しかし他方で、小泉さんが、ヒュームの場合にはこうして行われた謙虚さの獲得が、一般には「全面的懐疑と無関係に起こりうる」(p. 10) と主張しているように見えることが気に懸かります。これらはどのように繋がっているのでしょうか。

この論点が重要なのは、一つには、こうした哲学的立場のいわば発展が「ヒュームという一個人の事情にとどまらない」と小泉さんの主張されているからです。ヒュームが独白という形で「結論」を綴っている以上、これはとても重要な解釈のポイントだと思います。また、これと密接に関わり、小泉さんの解釈でまだ十分に解明されていないと感じるのが、「因果的要因の産物」であるような態度がどのように規範性を獲得するのかという問題です。これは自然と規範という自然主義哲学の大問題の一形態に見えますが、この点についても何かお考えがあればお聞かせください。

【回答】 小泉雄紀 (京都大学)

以下に、二点に分けて質問に回答いたします。

第一に、謙虚さの獲得が「全面的懐疑と無関係に起こりうる」(p.10)と述べたことについてですが、これは不明瞭な書き方であったかもしれません。仰る通り、ヒュームは全面的懐疑という段階を経て真なる哲学者に至るとというのが本稿の中心的なストーリーですが、この箇所での私の意図していたことは、誇りと卑下という二つの情念が、まさに情念として感じられるものであり、全面的懐疑の状態にある探究者(ヒューム)が、(意図的な)推論を行って獲得したものではないということを強調することになりました。例えばこれらの情念が、全面的懐疑の中で理性によって獲得されたものであるならば、今まさに疑っている理性に依拠して獲得されたということになってしまうためです。

同様に、ヒュームによって誇りと卑下の釣り合いと説明される謙虚さについても、「釣り合う」ということ自体には推論が含まれません。もし反対に自分が誇りと卑下を持っていることの認識から(どのような形かはわかりませんが)推論によって謙虚さに到達したのだとすれば、この場合もまだ疑われている理性を先に用いたということになってしまいます。

以上を踏まえ、本稿が「全面的懐疑と無関係に」と表現した箇所については、「理性の使用を差し挟まず」のような形に言い直すことが適切であったというのがこの件に対する回

答です。

第二に、ヒュームの哲学的立場に関する自然と規範の関係についてですが、正直に言えばまだ十分に考えがまとまっていません。しかし、この件に関して興味深く感じるのは、ヒュームが『人間本性論』一卷の最後で真理を高望みかもしれないと断り、あくまで誤りを避けるというところに自身の望みを置いているという点です(T 1.4.7.14)。そうであるとすれば、ヒュームが獲得した、あるいは則っている規範とは、探究活動に際して「すべきこと」というよりは「すべきでないこと」を指示するものであり、ここにこの規範の正体、ひいてはその規範の源泉を探る手がかりがあるのではないかと考えています。もっとも、いかにして規範が生じるのかについては、具体的な考えとしてまとまっていないというのが現状です。

以上